

ロジスティックス 東西南北

セブン-イレブン・ジャパン

運輸サプライチェーンでの取り組み「6か条」



ハイブリッド車を続々投入

全国に約1万9400店舗あるコンビニ「セブン-イレブン」を運営する、セブン-イレブン・ジャパン（本社・東京都千代田区。古屋一樹社長）は、1974年の第1号店オープン以来、環境配慮型サプライチェーンの構築に熱心だ。

そこで今回は、いわば「エコ6か条」とも言うべき、同社の取り組みをお伝えしよう。

①共同配送による環境負荷の低減

店舗当たりの1日の配送トラック台数を平均42台まで圧縮。その後も牛乳や冷凍食品、化粧品、雑貨などと拡大。2015年度には同9台にまで削減している。

この試みは、CO₂削減はもちろんのこと、作業効率の効率化や燃料費・人件費などコスト削減にも直接結び、さらには温度帯別配送（常温、チルド、冷凍など）の構築を可能とし、品質管理向上にも寄与している。

②環境配慮型車両の積極投入

ハイブリッド車を続々投入

ディーゼル・トラックからハイブリ

1974年当時、店舗に陳列される食品や日用雑貨など約3000アイテムは、各メーカーがそれぞれ各店舗にトラック配送する姿が普通で、その数は1日平均70台にも上った。

だが、これは非効率で、しかも交通問題や騒音、排ガスなど環境にも負荷をかけていた。

このため同社は、「共同配送」という新システムを導入、複数のメー

カーの商品を1台のトラックで一括配送するシステムを極めて行く。

1976年には最初の共同配送を生鮮品でスタート。これにより、1

店舗当たりの1日の配送トラック台数を平均42台まで圧縮。その後も牛乳や冷凍食品、化粧品、雑貨などと拡大。2015年度には同9台にまで削減している。

この試みは、CO₂削減はもちろんのこと、作業効率の効率化や燃料費・人件費などコスト削減にも直接結び、さらには温度帯別配送（常温、チルド、冷凍など）の構築を可能とし、品質管理向上にも寄与している。

ハイブリッド車を続々投入

ディーゼル・トラックからハイブリ

ツド・トラックへの転換を推進しているのも、特色の一つであろう。

同社は2016年5月末現在で、約5300台の配送車を利用しているが、内ハイブリッド車は実に65

0台にも達している。

ただし同社は、この数に満足していないよう、2020年までに、この数を全体の20%までアップすると宣言する。

加えて、資源節約・廃棄物削減に寄与するリトレット・タイヤ（再生タイヤ）も積極的に利用、その数は2016年2月末までに延べ約

7500台、交換タイヤ本数は実に1万6000本を超える。

③車載端末を駆使したエコ運転

共同配送センターと店舗との間をシャトルする配送トラックの全車両に、車載端末を搭載。

走行距離や速度、急発進・急加速、

アイドリング時間などの情報を、GPSを使って収集・分析、安全運転のための運行指導やエコドライブ講習を実施している。

これにより、ドライバー一人ひとりに、「安全運転＝エコドライブ」

という意識につなげて行くのが狙いだ。

④保冷ボックスによる燃費アップ

アイスクリームや冷凍食品を運ぶ冷

凍専用車は、これまで納品の停

車時でも、エンジンをかけて保冷に努めていた。

だが、保冷ボックスの導入により、

エンジン停止による納入作業を可能

とし、燃費向上＝環境負荷削減に

挑んでいる。

⑤使用電力量制御装置の導入

各設備の使用電力量をチェックし、

一定レベルを超えないように負荷設

備を制御する装置「デマンドコント

ロール」を物流センターに導入。

2015年2月現在で、145セン

ターチ中67センターに設置済みだと

言う。

⑥自社以外での排出量も把握

同社は、セブン&アイHDINGS

の「地球温暖化防止基本方針」に従い、自社以外、つまりサプライチ

ーン全体のCO₂削減量を把握。

原材料・商品調達や配送、商品使用

廃棄過程から出るCO₂の削減、い

わゆる「スコープ3」を推進する。

これらの「6か条」で、セブン-イ

レブン・ジャパンは、これら「6か条」

をさらに徹底、環境負荷低減に努めて行くようだ。

(写真提供：セブン-イレブン・ジャパン)